

SDGs 時代における三方よしの経営理念

於駒沢大学 2023.06.10

同志社大学名誉教授 末永國紀

はじめに

トリレンマの解決： 経済発展維持・地球資源開発・地球環境保全

I 近江商人の商いの手法の要点

持ち下り商い（行商時代） ⇒ 諸国産物廻し（出店開設以後）

- 1 他国商い（800年の歴史）
- 2 卸商い（基本は小売商相手）
- 3 鋸商い（文化の伝播と地方物産の開発）—現代商社の先駆
- 4 在所登り制度（商いの常備軍団）

II 他国商いの自覚—三方よし精神

1 三方よし精神の原典：他国商いの心得のエッセンス

1754年「宗次郎幼主書置」麻布商中村治兵衛宗岸の幼主宛遺言

「一たとへ他国へ商内ニ参候而茂、此商内物此国の人一切の人々皆々心よく着被申候様ニと自分の事ニ不思、皆人よく様ニとおもひ、高利望ミ不申、とかく天道のめぐみ次第と只其ゆくさきの人を大切ニ思ふべく候、夫ニ而者心安堵ニ而身も息災、仏神の事常々信心ニ被致候而、其国々へ入ル時ニ右の通ニ心さしをおこし可被申候事、第一ニ候」

2 明治23年（1890）『近江商人』（「書置」の漢文調翻訳家訓）

「一他国へ行商スルモ總テ我事ノミト思ハズ其国一切ノ人ヲ大切ニシテ私利ヲ貪ルコト勿レ神仏ノコトハ常ニ忘レザル様致スベシ」

3 catchphrase 「三方よし。売り手よし、買い手よし、世間よし」

「三方よし」言辞の初出 ⇒ 江戸後期

4 当主はリレーランナー（宗岸書置）

「我が子に渡すまでわずか三十年が一生なり、一切を大事にして我子へ無事堅固にして渡さるべく候、わすかの内の手代番頭すると思ひ、大切に可被致者也」

宗岸は仏教篤信者、隠居後は仏門へ

Ⅲ 石門心学と近江商人

1 石田梅岩（1685～1744）

世俗的商いの有用性を積極的に主張

主著『都鄙問答』商人最下位身分、私欲、利益肯定

『石田先生語録』一儉約と正直

「凡^{オヨ}ソ天地ノ間ニ生ヲ受ル物^{ヤシナ}育ヒ無クシテ有ルベカラズ。（中略）

如是五穀ヲ育ヒ立ル為ニハ万人コトコトク苦シムナリ。此ノ苦

ミヲ哀シメバトテ一日モ^{クハ}食ネバナラヌ此ノ身ナリ。此ノ身ヲ養

フコトヲ思ハゞ無益ニ^{スタ}舍ル物ノ^{ツイ}費ヘヲ思フベキコトナリ。」

2 近江商人矢尾喜兵衛家

埼玉秩父に出店開設（1749）、酒造業、卸小売業、質屋業

秩父開店 100 年後、他国者としての自己規定

四代目喜兵衛：正直と儉約を強調する石門心学の根本理念を、
経営の現場に活かす

「此度店之若者子供等へ申諭し異見之事

一遠国渡世の身分ハ地の商人衆と違ひ、身持又格別正しく有へ
き筈之事也」

3 秩父事件（1884）時の襲撃回避

「秩父暴動事件概略」：“高利貸営業者ノ如キ不正ノ行ヲナス者
ノ家ニアラザレバ、破却或ハ焼棄ナスナド決シテ致サズ“

むすびに一三方よしの現代的解釈と現代優良企業の共鳴性

・三方よしの順番について

・社員第一主義の経営者：

塚越 寛 （1934 年生～、伊那食品工業(株)）

近藤宜之 （1944 年生～、(株)日本レーザ）

山田昭男 （1931～2014、電気資材メーカーの未来工業(株)）